

■ 編集だより

編集後記

以前に「舟を編む」という映画を見たことがある。フィクションではあったものの辞書を編纂する地道な作業をする出版社の編集者が主人公であり、十数年にわたる「用例採集カード」の作成など根気のいる膨大な作業と紆余曲折の末に辞書が完成した場面には強い感銘を受けたことを覚えている。この「編む」という言葉は辞典（大辞林 第三版）によると、『① 糸・竹・髪の毛など細長い物を、結び合わせたりからみ合わせたりして、一つの形ある物を作り上げる。② 文章を集めて本を作る。編集する。③ いくつかの物をまとめて一つに組織化する。編成する。』と3つほどの意味を持つとのことである。編集委員会による学会誌を「編む」作業は直接的には②を指すが、①の織物などを作る際の「編む」にも関係があると思っている。

織物は経糸（たていと）と緯糸（よこいと）が互い違いに組み合わされており、織物を作る際には、しっかりと張られた経糸に対し、緯糸を左右に運びながら織っていく。経糸は織物を支える糸で、織物の内側でじっと支えている。経糸がしっかりと通っていて初めて緯糸は自由に動けることになる。このように緯糸を織り成すという、様々な創意工夫と丁寧な作業を通じて1つの作品が作られていく。

この経糸と緯糸の関係は様々に例えられており、古くは孔子が、経営について経糸がまさに「経」の字で、自在に動く緯糸は「営」の字であると言っており、経糸とは常識的で原則的な考え方であり、「自律性」「責任」「価値の創造」などの戦略手法、基本手法が相当し、これに比して緯糸は時機に合った戦略や柔軟性、自由な発想などである。また、教育においては、経糸を教師と子どもとの関係性、緯糸を子ども同士の関係に当てはめられ、人生においては経糸が一人一人の人生であり、緯糸がその時その時の行いであったりすることで、経糸と緯糸を合わせてその人となり形成されるとも考えられる。その他、歌舞伎狂言において経糸は「歴史的な事実」つまり史実のことを指し、緯糸は狂言作者の「空想による味付け（ストーリー）」であり、この経糸と緯糸が織り成す芸術品が歌舞伎狂言であるとの考え方がある。

これらの関係性を精神科医療に当てはめてみると、過去からの論考や多くの書籍や研究報告など歴史的な蓄積の中で形成された精神医学体系という経糸に対して、個々の精神科医は日々の診療活動や援助活動という緯糸を通じていくことが精神科医療を織り成すことと解釈された。さらに精神医学の研究に敷衍すると過去からの歴史的な蓄積である経糸（変わらないもの）をしっかりと学び（縦方向に糸を張り）、得られた知見を緯糸として（横方向に）丹念に編みながら研究論文を生み出していくことが、将来に残る作品（論文）を生み出すことにつながるのではと考えられた。

最近、こころのケアにおいて精神科医療の関係者のみならず、心理職や作業療法、社会福祉関係など多職種とのコラボレーションの大切さが広く指摘されている。ここで、良い織物は柔軟性や着心地に優れて長持ちするが、温かい織物が人々の冷え切って疲れた心を包むように、様々な方向性をもつ活動や努力が有機的に織りなされて、良いものが編み出されていくような姿勢を続けていくこと、そのような日々の歩みが大切ではないかと思う。そして、学会誌の編集を考えたとき、精神医学や心理的研究、社会的研究などで蓄積されたエビデンスや本誌における過去からの歴史的経緯を尊重しつつ、会員諸氏より投稿をいただく貴重な研究論文や本学会などでの諸報告を織り込んでいく作業を通じて、願わくは学会誌として後世の評価に耐えうるような良いものが編まれていくことを期したいと思う。

谷井久志